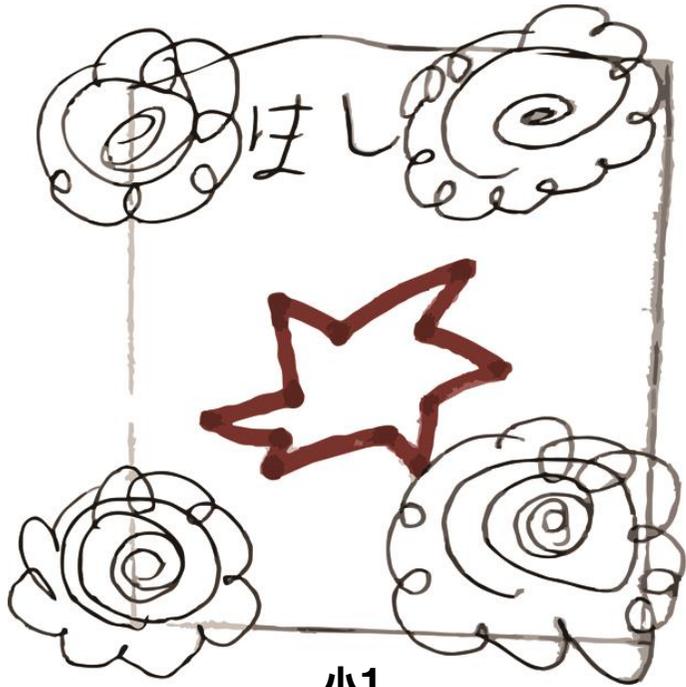


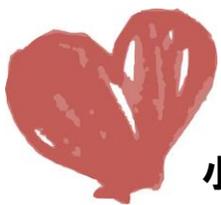


小1

民話は、生活の中で語り継がれてきたものであり、語り継がれなくなったその時に、消えてなくなってしまう。高度成長期を経て様々なメディアが発展する中で、多くの民話は忘れさられる運命にありました。新修津山市史別巻「つやまの民話」の中かから、私（山中）が幼いころ祖母からよく聞いた懐かしい昔話や伝説・民話等をお伝えしたいと思っています。



小1



小1

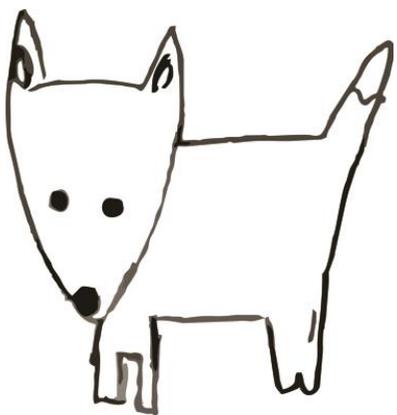
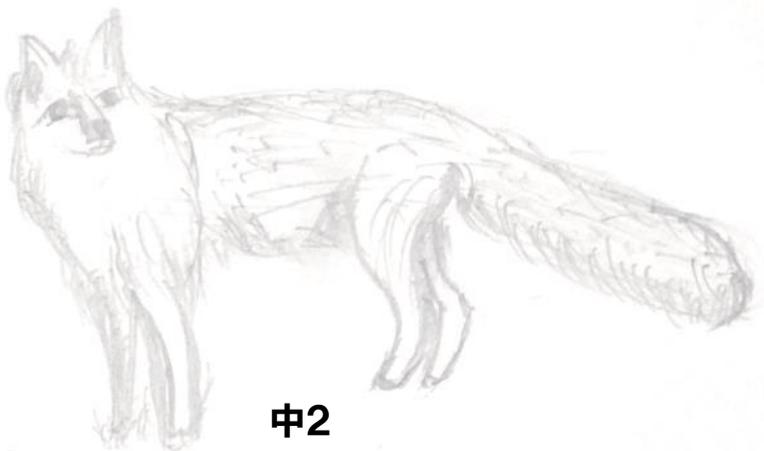
## 狐の嫁入り

この辺で狐の嫁入りというのは、十一月にたあーつと北気（時雨）が来るのをいう。昔はむしろでもみ干しをしようりました。また、狐の嫁入りがきて雨が降って、たとんだり広げたりで粉が干りやせん、いうようなことを言いよったと思います。そしてたら向こうの方からばあつと虹がたってな。

## 狐の行列

婆さんから聞いたのは、吉井川の傍らに、昔は旧土手しかなかったんです。旧土手に、狐の行列いうんか、

明るい光で、だあつと歩いた、という話は聞いたことがある。



淵のごんご

作陽高校の下のところが  
覗き淵いうところなんです  
けど、あっこは子どもの中に  
な。ゴングがおるけん、あ  
っこに行って泳いじゃいけ  
んてな、親父によう言われた  
もんですわ。

とで。ごんごはかっぱです。

人を引きずり込んで、おぼれ  
死にさせるんじやいう話は  
子どもの頃からずうつと聞  
いとりますなあ。この辺じゃ  
あ

じゃけど私は神伝流をその  
ごずつとやって、先生に連れ  
られて、覗淵に鯉を取りに潜  
って

取りにいったりですね。深い  
淵に行ったら危険で危ない  
ということ、子供が泳ぎに  
いっちゃあいけんよいうこ



小1



小4



中2

## 古屋のもる

むかしなあ、お爺さんとお婆さんがおつて、お爺さんとお婆さんは、なんば（とうもろこし）や栗や柿や表のえんだ（縁側）へ乾かしとるんじゃ。そうすりゃあ、山から、いたずらな猿が出てきて、それを取って食べるんじゃ。そう取ってたべられちゃあ、どうもならんけん思うて、猿がきたらどうして逃がそうか思ようたところが、雨がしよぼ、しよぼ降るときに、また猿がきたんじゃ。



小1



小4



中2

そうしたら、お爺さんとお婆さんがこたつにあたって。

「お婆さん、お婆さん、世の中で、何が一番きょうといか」「そりゃとらや狼が一番きょうとい」「そうか、わしやあなあ、とらや狼よりなあ、もるが一番きょうとい」「なしてきょうとけりゃあ」「とらや狼がきたなあ、だあつーとかけて逃げてりやええけど。もるが来たなあ、どけえも逃げようないけん、もるが来たんが一番きょうとい」

それを聞いたお猿さんが柿とりに来と

ったけれど、「もるといいうものがおるかやあ、とらや狼よりきょうといとは」「ううて逃げたんじゃあ。



小1



小4



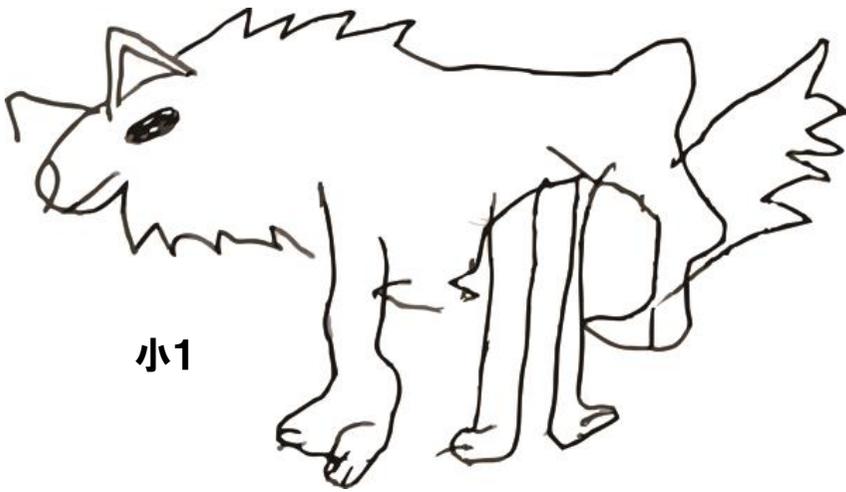
中2

# 屋根が漏る

屋根がザアザアザア漏って、貧乏してな。

トラオオカミが来てから、

「虎狼はきょうとい」「言ったらな、「虎狼よりは屋根が漏るのがきょうてい」  
言ったんじゃ。



小1



小4

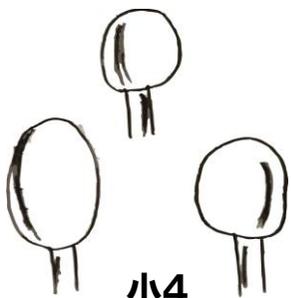


中2

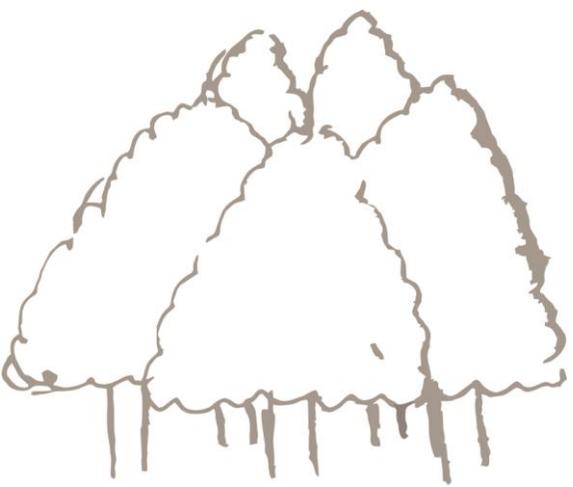
これからは伝説です。



小1



小4



中2

## 宇那是森

むかし、子どもが生まれなことに悩んでいた帝さまが、高野の神様に子どもができますようにとお願いされました。すると、皇后様の夢の中にこの棕の巨木が出てきました。そしてその後無事に皇子様がお生まれになりました。その後、子どもがほしいと願う人が次々に高野神社にお参りするようになり、たくさんの人々がその願いを叶えることができたそうです。

## うなでが森



小1

解説 今でもその棕の木があり、竜が毒を食べて棕の木の上で死んでいた。あまりの大きさと棕の木が竜の重さで割れている。

遠い遠い大昔には、このあたりは一面の森で大木が茂り合い、枝と枝とがからまっても昼もなお暗いようなところでした。そしてこの森から神楽尾山の南にかけて広々とした池があり、そこに大きな竜が住んでいて、時々あらわれでは人を食ったり、高野神社にかがてあった額の金箔をなめたりしていました。困った、村人は、何とかこの竜を退治しようではないかと相談し、額に毒をぬって、とうとうその竜をたおしてしまいました。

その後村人は竜のたたりをおそれ、骨を後ろの山にうめました。今、龍沢寺のうら山にある山にある蛇塚というのがそれで、その近くは胴や耳をうめた胴塚・耳塚があります。

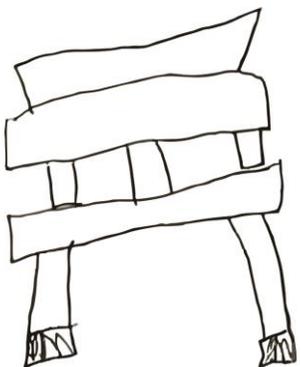


中2



小4

# 高野神社の蛇



小1

宇那提森の棕の木が、子供の頃からうわっと割れてて、天に蛇が出ていったというのが頭の中にあるんですけど。高野神社がウガヤフキアエズノミコトといって、私の記憶では、海彦山彦さんのお父さんで、生まれたときに産屋を葺く間がないくらい元気で、産屋がない間に生まれたと。ここが安産の神様なんだということを知っていたもんです。昔は、ここが門前で、非常にいろんなものがあって、町内はなんでもござれのところだったんです。小さな街でね。

昔、高野神社の近くに、子どものおらん人がおって、高野神社お参りしよったんじゃけど、戸川の宿から娘さん、子どもをもらって育ちようたら、どうもその子どもさんが夜な夜な外へ出る。というのが、昔は縁側じゃないけど外の石のところがありますよね、その草履が濡れとると。へえで、どうもおかしい、いつも濡れとると。義理のお父さんになる人が、ある夜付いていったら、蛇になって、紫竹川にいつて泳ぎようたと。それを見られたということで、その棕の木のところに登ってしようたけど、みなで退治をしたんじゃと。

せえで美和山古墳がありますわね、そこに蛇塚じゃ胴塚じゃ耳塚じゃありますけど、あそこへ退治して埋めたんじやいう説があったり、長法寺にその一部があるとか噂を聞いたこともあったり、よくわからないんです。

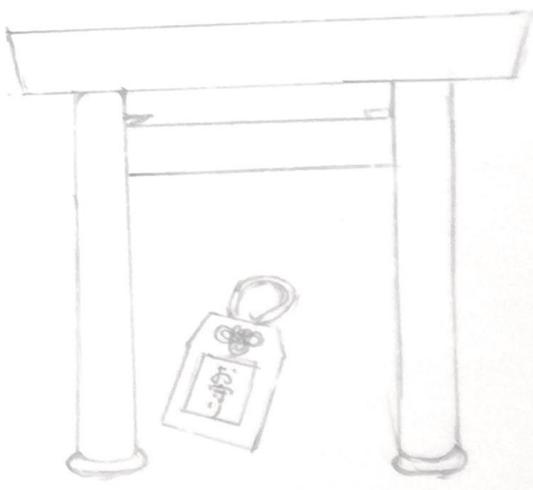
せえから龍沢寺というのは、龍という字を書くんですね、それもちょっと不思議なのと、高野神社のなかに西側にミサキ神社があるんです。吉井川が突き出て、高瀬舟が通って。

商売の神様みたいなんですけど。お百度詣りをしたり、みなさんそこでは願いごとが叶うといつて。水に関係のあることが結構出てくるんです、この土地はね。

## 御先様（おみさきさま）



小4



中2

今から約380年前、津山城主森公の家臣に吉田長左衛門という者がおった。その子の作左衛門は力が強いのでいつもそれを自慢していた。

ある日、友人と相撲を取ったが勝つものはなかった。一層自慢の鼻を高くした作左衛門は下男市助に相手を命じた。市助はよく頑張って投げ飛ばした。主人に対して無礼だというので手打ちにしまった。

市助の父は悲しみ、亡骸を背負って高野神社参り、罪もないのに殺されたとお祈りしたが、気が狂い家に帰ってあらむことを口走っていたが死んでしまった。

その後、吉田の家には日夜次々と不思議なことが起こり、長左衛門父子を苦しめたが、ある夜下女に対し、「我は高野神社の末社御先神なり、長左衛門父子が市助を殺せしこと最も無道なれば、夜毎に神罰を加うるものなり」と空から聞こえてきた。そして最後に筆と紙とを出せというので取り揃えたところ空のまいあがり、まもなく「忍ぶれど恋しき時はあしひきの 山より月の出でてこそくれ」という紀貫之の歌を美しい文字で書いた紙が降ってきた。一家の者は驚き恐れ、この神を高野神社に奉納して自分たちの悪かったことをお詫びしたが、ほどなく父子とも死んでしまい、その後も吉田の子孫には神罰の絶え間がなかったということである。